

### 第53回九州芸術祭文学賞 選考経過

宮崎県の今年度の応募数は19編。昨年より4編少なかった。男女の内訳は男性9名、女性10名。年代別では20代1名、30代2名、50代5名、60代7名、70代3名、80代1名で昨年同様60代が多かった。

審査は例年通り応募者の名前を伏せた上で厳正に行い、まず以下の10編を選んだ。受付順に「哀しみのイクヨブルー」「花アカシア」「青空の追憶」「ブレス・ユー」「たとえば、ドングリを拾いに」「山芋を掘る」「生まれいずる者たち」「グエン・ホア」「航跡」「杣道」。この中から再度テーマ、構成、文章力などさらに細部にわたって話し合い「ブレス・ユー」「たとえば、ドングリを拾いに」「グエン・ホア」「航跡」「杣道」が残り、長時間の論議の結果「たとえば、ドングリを拾いに」が地区優秀作「ブレス・ユー」が次席に決まった。

以下、受付順に応募作の感想を簡単に述べておく。

「OHANA〜ルームメイトはお母さん」ルームメイトとして母と過ごす日々の出来事の中で大切なものは何かを主人公は気づいていく。爽やかで好感は持てるが話を詰め込みすぎる。削るところは削って心を通わせていく母と娘の感情を掘り下げて書くといい小説になる。

「一つになろうよ」冒頭はこれからのなにが起るのだろうかと思わせる。偶然若い女性とネットで知り合った主人公は次々と不思議なことが起る世界へ迷い込む。後半は書き急いだのだろうか不可解なところがあり理解が追いつけないのは残念である。

「哀しみのイクヨブルー」文章は上手い。話の流れに乗せてどんどん読ませる魅力はあるが謎解きのように進んでいくストーリーは説明的になっている。テレビドラマの刑事物を読んでいるようだ。

「花アカシア」本来ならドロドロするはずの夫婦間の心理の動きが短い会話でさらりと描かれた透明感のあるいい作品である。しかし残念なのはラストの花アカシアの説明が長すぎ、冒頭の花アカシアとの繋がりが見えにくくなっている。

「青空の追憶」小6で精神を病み登校できないまま20代になった主人公が、普通とは幸せとはと苦しむ感情はよく描けている。しかし「生きていてよかった。私、幸せだよ」と言うラストの言葉にはほっとするものの、ここからが物語として問われるところだろう。

「烏帽子を冠った男」貧しいが心豊かな家族の物語かと読み始めると少女の前に宇宙船が降りてきて「昔、ウカという男が来たでしょう」と異星人の男が言う。ウカとは日本神話に出てくる神、天稚彦だとわかる。舞台はどうやら古代らしいが、日本書紀の引用が長すぎる。

「ブレス・ユー」文章に安定感があり、構成もしっかりしている。溺愛する娘の陽子を亡くした母の喪失感。パートナーであった陽子を亡くした仁美の哀しみ。それをただ見つめることしかできない私。陽子という一人の女性の死が三人の女性に与えた哀しみと再生を描き、新鮮で印象的な作品である。

「たとえば、ドングリを拾いに」コロナ禍でリストラにあい失意の中で田舎へ帰った主人公は、そこで父のところに来るヘルパーの男に出会う。男に誘われ森林を守るサークル「どんぐりの会」に参加する。失意から立ち直っていく主人公の心の動きが力強く書かれている。

「半夏生の頃」本好きの72歳の主人公の若い頃の思い出や仲のよい友だちのこと、95歳の母のことなど何気ない日常がおおらかに描かれ気持ちのよい作品だが、文章が散漫で整理が必要である。原稿用紙の使い方も見直して欲しい。

「我行く先に姿見せるなよ」小学4年生の少女が語る村の生活や行事が丁寧に描かれている。しかし作者が書こうとしたのは、まだらの子という伝説めいた話を背負う少女と母親の物語ではなかろうか。省くところは省き、書き直せば伝承を活かしたいい作品になると思う。

「山芋を掘る」文章は読みやすく一気に読める。山芋を掘り始めてもすぐに本心は言えない。だからいつものように釣りの話から始める。しかし釣りの話が長すぎる。職場のこと校長との駆け引きなどもっと踏み込むべきことがあり、そっちで山芋を掘って欲しかった。

「そら、でーじゃ」S49年夏、山と田んぼばかりの田舎にひとりで住む祖母の暮らしを8歳の少女が語っていく。そこには「大人の不思議」がいっぱいある。作者は少女のお喋りの形としてこの作品を書いたのだろうが、そうであってももう少し整理しなければ思い出話としてしか読めない。

「生まれいずる者たち」ひとり娘を海で亡くし妻も自殺して漁へ出なくなった主人公。小さな漁師町の風景や、そこで暮らすひとたちのおおらかさと互いを思いやる優しさが丁寧に描かれている。前半はあらすじを読んでいるようだったが、愛美の登場が主人公に再び漁に出る決意をさせるところがいい。

「アリのアリストテレス君」アリのアリストテレス君の夢を見る江間少年は夢の中のアリストテレス君の活躍で自身の内向的性格も変化していく。アリを擬人化して描いたのは面白いが、読者がいまだ読んだこともないようなアリストテレス君が経験した世界を描いてこそこの作品は興味深いものになる。

「雨の音」作者の文章への真摯な気持ちは伝わってくるが、話が急に飛び、時系列が曖昧になっている。自分史のようなこの作品を小説にするにはあれこれ詰め込みすぎずに話を絞り込むことが大切である。佐野という老婦人とSが酒を呑むシーンの駆け引きは面白い。

「グエン・ホア」会話文がうまく、作品の流れを会話で引っ張っていく。丁寧に描写された情景も目に見えるようである。しかし技能実習生の置かれている厳しい現実が深くリアルに描き出されているわけではない。そこが残念でもったいない作品である。

「海彦」構想のスケールは大きく、創り出された世界は躍動感がある。海嵐の中を走り抜ける海彦と海咲の姿や海嵐の迫力の描写は引き込まれるが、天システムに関しては少し理解しがたかった。

「航跡」日中戦争の最中、三人の同級生の若者が夢と希望と悩みを抱え、それぞれの道を進もうとする姿を描いている。弱視の瑛治が「技療手」として入隊する話は他に類をみない実にユニークだが、他の戦時の若者の行動が典型的である。

「杣道」育ての親だった叔父が亡くなって3年が過ぎ、叔父と30年以上前に登った祖母山へ行く。下山の途中杣道に迷い込み登山者に助けられ自分はまだ生きてきたのだと思う。山の描写はよく描かれているが、両親の悲劇や卑劣な父親の血が自分にも流れているといった表現はストーリーの流れに巧く組み込まれてはいるものの安易な気がしないでもない。